

## 東日本視察交流記（11） スニーカーで田植え

6月13日（月） （その4）

夕方4時半ごろに登米市米山の有限会社おっとちグリーンステーションに着いた。「おっとち」というのは「追土地」という地名なのだ。

代表の福泉さんが迎えてくれた。名刺には「[営業品目]ササニシキ・ひとめぼれ・みやこがねもち・にんじん・ほうれん草・枝豆・大豆・納豆・ハウス野菜各種 他」とある。

ササニシキは4町5反（30町の内）、野菜は毎日100ケースを出荷しているという。20日から40日の栽培期間で12回転するのだ。



今は小松菜を、1ケース20把で120ケース、3か所に卸している。ロット（量）が大きいので以前は東京に出荷していたが、トラブルが起きた時たいへんなので仙台中心に切り替えていった。買う側の意向で契約栽培・最低単価保障が実現し雇用農業ができるようになった、と。



「毎日毎日、それだけ出荷するということはすごいことですね」と私。「土づくりをいろいろやってきました。土地が良いと肥効を長く徐々に発揮させることができ、肥料をおさえて連作障害を防ぐことができます。それにジャパンサイクルさんの肥料がとてもよいのです」。昨日立ち寄った「いわでやま資源循環モデルセンター（(株) ジャパンサイクル）」（写真下）がつくる肥料が、食料残飯などいろいろなものを含んだ高温処理で、均質な良い肥料であるというのだ。

「漁業では、たとえばマグロを追ってインドネシアからケープタウンまで行く。重労働なので食べるのが一番の楽しみ。おいしい米を500袋納品している」。



いま乾田直播（じかまき）に取り組んで5年目である、という。4月の下旬に水を入れていない田に種をじかに播く。作業の前倒しができ、しかも「スニーカーで米づくり」ができるので、若者を農業にひきつけられる。

刈取も 2 週間遅くなる。労力配分は調整できるし、農機具やライスセンターは同じものを使えるので規模拡大になる。しかも、刈取期に温度の寒暖差が大きくなって米の味が良くなる、という。

写真中は直播田に水が入った後の状態である。なんと作業効率のためか 1 町田の広さにしているのだ。1 町 (1ha) という大きさを 1 区画の実物で見ることができて感動した。ただし、水利のために田は水平にしなければならず、それをする機械が数百万円という。

佐々木さんが、10ha、20ha 単位の耕作放棄地があるという情報を紹介した。連作障害で放棄されたのだという。福泉さんは、30 センチのプラウをすれば連作障害は克服できる、肥料のやり過ぎもよくない、と。そこは根菜に向いているかもしれない、と話は弾んだ。私たちが探求してきた放棄地の再生と被災農家の営農の結合という構想に少し光が射してきた。

日も暮れてきたので辞することにし、お礼を言ってステーションを後にした。今日はいささか強行軍であったが、いずれも有意義な話を聞くことができて実りが多かった。

昨日から自然楽農園、マルセンファーム、ダイアファーム、おっとちグリーンステーションという元気のよい先端的な営農グループに引き合わせてくれた佐々木さんにたいする感謝は大である。営農グループの佐々木さんに対する信頼は厚いものがあるが、それは彼のやさしい人柄と並みではないお米に対する情熱がそうさせるように思えた。

今夕は私のために宴をもってくれるという。料理店「ひで」にむかって車を走らせる。

(続く)

